

異なる分類法による日本語動詞の研究

A Study of Japanese Verb by Classification

董 国民

Guomin Dong

Abstract This paper deals with the classification of Japanese Verb into the verb groups such as Conscious Verb and Non-conscious Verb, Movement Verb and State Verb, Intransitive Verb and Transitive Verb, and so on. Through our analysis of those verb groups classified from the different viewpoint, the special features of each group of the verbs, especially the difference between Intransitive Verb and Transitive Verb, were made clear.

1. はじめに

動詞は動作、作用を表わし、名詞・形容詞と共に言語生活の中に無くてはならない品詞であり、日本語だけではなく、世界のどの国の言語でも、同様に、コミュニケーションに不可欠な道具の一つである。日本語では、動詞それ自体にいろいろな変化があると同時に、他の品詞に密接と関係しているので、異なった視点から、正確に動詞のさまざまな特徴を認識、把握することは、日本語の学習や教育に、有意義なことだと思ふ。

本稿では、日本語の動詞を、活用による分類でなく、異なった立場から分類し、それぞれの特徴を考察するとともに、他の品詞との関係を検討することにした。

2. 意志動詞、無意志動詞

意志の有無によって、動詞は意志動詞と無意志動詞に分けられる。一般的に動詞の表わしている動作

が意志でコントロールできる動詞は意志動詞であり、それに対して、できない動詞は無意志動詞である。外国語として、日本語を学習している中国人には、「池には魚がいる」ということを「池には魚がある」と言ってしまうことがよくある。それは母国の言語の影響もあるが、主に日本語の動詞を明確に理解していないからだと思われる。「ある」と「いる」は共に「存在する」という意味を持っているから、中国語の「有」に訳せるが、実際には「ある」と「いる」の使い方は同じではない。『新日本語』(人民教育出版社、1980)という教科書に、生命のある(あるいは動ける)主体の存在を表す時に、「いる」を使い、生命のない(動けない)主体の存在を表す時に、「ある」を使うと書いてあるが、『いる』と『ある』の区別は生命の有無(動けるかどうか)に関係があるのではなく、意志の有無に関係がある。木や花は生命があり、車は動けるといっても、「いる」が使えないのである。意志の有無によって、この区別は明瞭になる。

他の品詞(辞も含む)との関係を見ると、動詞の意志の有無は、前に置かれた名詞に関係し、次にくるムードを表わす助動詞などにも関係する。意志動詞の後ろには禁止、命令、勧誘、希望などのムード

を表すものがくるが、無意志動詞の後には来ない。その量から見ると、無意志動詞は数が少なく、自然現象を表す動詞に集中している。動詞の意志の有無で分類できないものも多くあり、「走る」のように、意志動詞でもあり、無意志動詞でもあるものがある。

3. 動作動詞、状態動詞

以上は意志の有無によって、動詞を意志動詞と無意志動詞に分けたが、次に、動詞を、動作を表すか、状態を表すかによって、動作動詞と状態動詞に分けたい。「読む」「考える」「借りる」など、動作を表す動詞は動作動詞であり、「ある」「いる」「できる」など、状態を表す動詞は状態動詞である。ところが、「聳える」「富む」「優れる」などのような動詞は「ている」を語尾につけない形で用いられることはなく、いつも「～ている」の形で状態を表わすので、いろいろな性質から考えると、状態動詞に入れるのが便利なので、ここでは、準状態動詞と呼びたい。

動作動詞は、さらに、いくつかの種類に分けられる。動作の種類から、身体動詞と精神動詞に分けられ、動作の方向から入向き（求心的）動詞と出向き（遠心的）動詞に分けられ、動作の持続する時間から、持続動詞と瞬間動詞に分けられる。「食べる」「歩く」「来る」のように身体的な動作を表わす動詞は身体動詞であり、「感じる」「喜ぶ」「思う」のような精神的な動作（感情などの心理活動、認識など）を表わす動詞は精神動詞である。精神動詞に含まれる少数の動詞（思う、悲しむなど感情に関するもの）では、一般的にその主語が第一人称でないと、終止形は用いられない。つまり、この類の動詞の終止形は常に第一人称を伴っているのである。

「借りる」「もらう」「買う」などのような動詞は、その動作の結果が最終的に発話者に戻ってくるので、入向き（求心的）動詞と呼び、「貸す」「あげる」「売る」などの動詞は、その結果が発話者に戻らないので、出向き（遠心的）動詞と呼ぶ。入向き動詞は、動作の対象に付けられる助詞「に」でも、「から」でも使えるが、出向き動詞は、その助詞として、「に」しか使えない。

持続動詞とは、一つの動作或いは作用が一定時間内続いて行われる動詞である。「読む」「書く」「生活する」などの動詞のように、一定時間内続くのを常とする動詞は、これに属する。このような動詞は、「て

いる」を語尾に付けることができ、それを付けると、その動作が進行中であることを表わす。瞬間動詞とは、「死ぬ」「閉じる」「卒業する」などの動詞のように、その動作、作用が瞬間的に終わってしまう動詞である。瞬間動詞の語尾にも「ている」が付けられ、付けると、その動作、作用が終わってその結果が残存していることを表わす。「人が死ぬ」「目を閉じる」「電灯が点く」という場合の「死ぬ」「閉じる」「点く」のようなタイプの動詞は、絶対的瞬間動詞と呼ぶことができ、「卒業する」「結婚する」のようなタイプの動詞は、相対的瞬間動詞と呼ぶことができる。「卒業する」「結婚する」という動詞の場合、その動作が実際には瞬間的に終われないことがあるからである。しかし、人間の一生という時間から考えれば、卒業や結婚にかかる時間はやはり瞬間的なものだと言える。

動作動詞は、ある条件のもとで、状態動詞になる。動作動詞には可能助動詞「れる」「られる」が付けられると、それは状態動詞になる。あらゆる可能動詞が状態動詞であると言うべきであろう。また、上記の瞬間動詞に「ている」がつけられると、動作を表わさずに、状態を表わしていることになる。

次に動詞の活用、接辞から動作動詞と状態動詞の差異を見てみたい。状態動詞は終止形では、「机に本がある」「あの人は日本語ができる」のように、「現在」の意味があるが、動作動詞は一般的に「いつも」「毎日」「時々」のような頻度副詞を付けないと、「現在」の意味はない。「彼はアメリカに行く」の「行く」は「現在」でなく、「将来」の意味をもっている。さらに、動作動詞（上記の無意志動詞を除く）は命令形があり、状態動詞は命令形がない。しかし、状態動詞の中の「いる」は「部屋にいる」という命令形を持っているが、この場合は「外に出るな」という意味で、「外に出る」という動作を禁止する命令であり、動作動詞に近いものである。

他の接辞との関係から見ると、原則的に言えば動作動詞には、「ている」が付けられるのに対して、状態動詞には付けられない。しかし、前に述べたように、準状態動詞には「ている」が付けられている。この他に、動作動詞には「てしまう」が付けられるが、状態動詞には付けられないと言える。

4. 自動詞、他動詞

動詞を分類する場合に、日本語学習者にとって特に理解しにくいのは、自動詞と他動詞の区別である。自動詞と他動詞は意味ばかりでなく、直接にその前の助詞「に」とか「を」とか「と」とかなどに関係しているの、外国語としての日本語学習者には分かりにくいことが多く、この分類についての考察は非常に重要である。

自動詞と他動詞に関しては、いろいろな学説があり、代表的な三つの考え方がある。

第一は、安藤正次をはじめとした「他動詞は動詞の動作を他の人物または物体に及ぼす動詞」という定義によって、自動詞と他動詞を区別するものである。「お茶を飲む」の「飲む」のように、他の物に動作が及ぶのであるから他動詞であり、「人が寝る」「風が吹く」の「寝る」「吹く」のような動詞は、他の人物や物体に動作が及ばないので他動詞ではない、というものである。

第二は、松下大三郎、後藤克己が提唱した「他動詞は目的語を取る動詞」という統語的視点から自動詞、他動詞を区別するもので、「空を飛ぶ」の「飛ぶ」が「空を」という目的語の形を受けているから、「お茶を飲む」の「飲む」と同じで、他動詞であるとするものである。

第三は山田孝雄を代表とした動詞の自他動の区別を否定するもので、「それは人間が勝手に設けた区別で、大抵はそれで区別できるが、すべてを区別することはできない」とするものである。

それぞれに不充分なものがあり、第一の安藤正次をはじめとしたものについては、「ここで、妻と会う」の「会う」は「妻」という人物に及ぼしても、やはり自動詞だと言わなければならない。第二の松下大三郎、後藤克己が提唱した「空を飛ぶ」の「飛ぶ」は、どの辞書でも自動詞に規定されている。第三の山田孝雄を代表としたものについては、日本語を母国語とする人にとっては、無意識に日本語が使える、自他の区別をあえてしなくてもいいからかもしれないが、外国語として日本語を学習する人は混乱する可能性がある。筆者は、日本語の教育の立場から見て、動詞を自他に分けたほうが良いと思う。それで、動詞の自他をどういうふうに区別すべきか、以下に試論を述べてみたい。この方法の適否については、日本語界の諸先輩の御教示をいただければ、ありがたい。

上記の第一と第二の論が、自他の区別の説明ができない原因は、日本語が膠着語なので、動詞が動作

を及ぼす対象が必ずしも「を」という目的格助詞で示さず、他の格助詞「に」「と」「が」で示してもよいことや、対象の後に「を」という格助詞を要求する動詞は、必ずしも他動詞ではないことにあると考えられる。

他動詞は客体に対する動詞であり、客体がないと、他動詞が出てこない。言い換えれば、他動詞は動作を人、物に及ぼす動詞に入るはずである。しかし、動作を人、物に及ぼす動詞は、「会う」のようにすべて他動詞とは言えない。他動詞とは、主体が客体に、ある動作をやらせ、ある変化を起こさせ、ある状態にする動詞である。これに対して、自動詞は、主体が自らある動作をやったり、ある変化をおこしたり、ある状態になったりする動詞である。

「字を書く」のように、人間の「書く」という動作によって、「字」という客体が紙の上に浮かび上がってくるという変化が生じたから、「書く」は他動詞なのである。「妻に会う」の場合は、「妻」が動作もせず、変化もせず、主体の「会う」という動作の帰着点になるだけなので、「会う」は自動詞に入るのである。さらに、「人と別れる」の場合は、「人」が動作の主体と互動する対象になったので、「分かれる」はやはり自動詞である。以上の考えは、いかがであろうか。

次は自動詞と他動詞を、形態と意味から検討してみたい。

日本語の自動詞と他動詞は形態から見れば、日本語自身の特徴を持っている。自動詞と他動詞には、（起こる～起こす、壊れる～壊す、集まる～集める、付く～付ける）のような共通語根から、派生してきたもので、自他形態的に対立しているものと形態的に対立する相手のない自動詞（行く、歩くなど）、他動詞（読む、作るなど）があるのである。さらに、一つの形が自動詞としても、他動詞としても使えるもの（開く、閉じるなど）がある。ここで便宜上、以上の三つのタイプをそれぞれ、有対自動詞・他動詞、無対自動詞・他動詞、自他両用動詞と呼ぶことにしたい。

無対自動詞・他動詞、自他両用動詞は中国語と英語の（不及物、及物）とおおよそ対応するので、日本語を学習している人にとっては、理解しやすいが、問題になるのは有対自動詞・他動詞である。有対自動詞・他動詞はその数も非常に多く、区別しにくい。その形態と意味から、見てみたい。

有対自動詞・他動詞は、（集まる、集める）のよう

に同じ語根から派生してきたので、同じ語幹（集アツ）を持っているが、その区別は、語尾（集マル、集メル）が違っていることにある。それで、有対自動詞・他動詞の区別はその語尾から求められるのである。一般的に、有対自動詞・他動詞の中では、語尾の最後の仮名が「す」であると、それは他動詞であり、「す」でないものは自動詞になる。例えば、以下のようなものがある。

他	自
渡す	渡る
消す	消える
回す	回る
通す	通る
下す	下る
隠す	隠れる
流す	流れる
表わす	表われる
鳴らす	鳴る
返す	返る
落とす	落ちる
写す	写る
:	:
:	:

また、有対自動詞・他動詞の中では、下一段活用のものが他動詞であり、五段活用のものが自動詞である。例えば、以下のものがある。

他	自
伝える	伝わる
重ねる	重なる
緩める	緩む
集める	集まる
付ける	付く
届ける	届く
見つける	見つかる
上げる	上がる
当てる	当たる
掴める	掴まる
:	:
:	:

日本語の初学者に、以上の二つのルールを覚えさせれば、有対自動詞・他動詞の区別が簡単になるかもしれない。

意味から言えば、有対自動詞はそれが無意志動詞として使われると、受身という意味が含まれ、有対

他動詞は使役という意味が含まれる。もちろん、有対自動詞・他動詞の受身と使役の意味は実際的な受身と使役の意味ではやはり違いがあり、これらを明らかにするのが、これからの課題になると思う。

構文から見た場合、動作の結果の状態を表わす場合、有対自動詞・他動詞でも、無対自動詞・他動詞でも、自他両用動詞であっても、自動詞なら、「もうお風呂は一杯になっている」のように「ている」の形を取り、他動詞なら、「壁には地図が貼ってある」のように「てある」の形を取るのである。

5. 終わりに

以上、異なった視点から、日本語の動詞を意志動詞・無意志動詞、動作動詞・状態動詞、自動詞・他動詞に分類し、その差違と意味及び他の品詞（接辞）との関係について、検討してみた。日本語教育に些かでも貢献できれば、と思うが、筆者の能力には限りもあり、思い違いがあるのは避けられず、大方のご教授を賜りたいと願う次第である。

本稿作成中に、吉川先生から、いろいろな有意義なことを教えていただき、特に、森豪先生からは、詳しい資料まで提供して頂いた。さらに、本稿が出来上がってから、御二人の先生から、ご精読いただき、文字まで、お直しいただいたので、ここに、先生方の御指導、御配慮に対し、心から謝意を表わしたい。

参考文献

- 1) 金田一 春彦, 日本語動詞のアスペクト: 7, むぎ書房刊, 東京, 1976.
- 2) 佐藤 喜代, 日本文法—理論と教育—: 98, 明治書院, 東京, 1973.
- 3) 三浦 つとむ, 日本語の文法: 147, 勁草書房, 東京, 1975.
- 4) 岩岡 登代子, 岡本 きはみ, 外国人ための日本語 例文・問題シリーズ 動詞: 23, 荒竹出版, 1993.
- 5) 須賀 一好, 早津 恵美子, 動詞の自他: 122, ひつじ書房, 1995.
- 6) 須賀 一好, 自動詞・他動詞, 国文学解釈と鑑賞, 第 51 巻 1 号, 57-62, 1986.

(受理 平成11年3月20日)